最後のドン

飯干晃一

最後のドン

飯干晃一

角川書店

最後のドン

平成六年六月三十日初版発行

著　者――飯干晃一

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒102　振替東京二―一九五二〇八

電話／営業部〇三―三二八一―七一―八五二一

編集部〇三―三二八一―七一―八四五一

印刷所――凸版印刷株式会社

製本所――株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本は小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-872809-1　C0093

最後のドン

装丁／横山京子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　突発的なできごと　5
第二章　若頭選びの入れ札　59
第三章　組を襲う暗闘と亀裂　116
第四章　彼らは首脳を失った　172
第五章　義の理念と最後のドンは消えた　229

第一章　突発的なできごと

1

目撃者の話によるとこうである。

「大型トラックがブレーキをかけながら、いきなり右に寄ったんです。トラックは傾いて横転するかと思うた途端に、反対側からきたクルマとドカンと衝突したんです。それはすごい音でした。わたしは足がすくんでしまいました。こんなゴッツイ事故をみたのははじめてです。そのうち乗用車のほうから火が出てクルマが燃え出しました」

唇を慄(ふる)わせて語ったのは近所に住む四十五歳の主婦である。彼女は約五十メートル後方からこの事故を目撃した。

現場は高槻(たかつき)市から茨木(いばらき)市に向かう〝西国街道〟と呼ばれる道路である。時刻は午後九時すこし前だった。

この主婦とは逆に茨木市寄りから事故を目撃した人もいる。
「トラックの前に乗用車が走っていた。無鉄砲な人間が乗用車の前を横切った。わしはみておって危ないと思うたぐらいやった。乗用車は急ブレーキをかけた。マーチかミラージュで白いクルマやった。運転していたのは女の人やとあとでわかった」
三十八歳の男性で、トラック運転手なのでこまかいところまで観察していた。
「問題のトラックは別段前の乗用車を煽るように走っておったわけやなかった。わしのみるところ十分な車間距離を取っておった。しかし、みておるとトラックはまっしぐらに走ってきた。急ブレーキをかけた白いクルマはすぐに発進せずモタモタしておった」
この目撃者の説明によると、前方に道路を横切る人をみつけ、白いクルマはブレーキを踏んだ。うしろからトラックが迫っているのに、このクルマは急加速すべきところを、ノロノロしていたというのである。
「わしのみるところ、うしろのトラックは居眠り運転ではないにせよ疲れておったのか、注意力が散漫やったと思うね。こういう状況はわしにもなんぼか経験があって、いま思い出しても冷汗をかくことがある。トラックは前のクルマが急減速したことに気付くのが遅れたんやね。そこであわててブレーキを踏むと同時に、追突を避けるために右にハンドルを切った。センターラインをはみ出したところへ、反対車線からえらいスピードでクルマがやってきた。そこでドカンと衝突したというわけや。白いクルマはそんなこと知るかといわんばかりにわしの目の前を走り去った。その時このクルマの運転者が女やとわかった」

事故を目撃した人はほかにもあり、現場に到着した高槻署パトカーの乗員にこもごも事故のもようを語っている。四十五歳の主婦と三十八歳のトラック運転手の証言もパトカー乗員によって記録されている。

大音響とともに近所の住民たちも表に飛び出した。そして、この無残な修羅場をみたわけだった。

「乗用車のなかの人間を助け出そうと、ドアに手をかけたんやが、ドアが壊れていてビクともしませんのや。みんながアアじゃコウじゃと騒いでいるうちに、エンジンのところから火が出た。爆発するぞ、と誰かが叫んだので、クルマを囲んでいた者たちは逃げ出しました」

これは現場すぐ近くの四十八歳の飲食店店主の話である。

１１０番する人が多く、乗用車が火を噴いてから１１９番に電話が殺到した。

最初に高槻署パトカーが到着した。乗員はパトカー備え付けの消火器を手にして泡を吹きつけたが、タンクから洩れたガソリン引火の火勢にはとうてい太刀打ちすることはできなかった。

ついで高槻市消防局の化学消防車がやってきて、火を消したが、クルマはすでに焼けただれていた。前後の座席に二人の男性の無残な焼死体があった。

トラックの運転手は二十六歳で、頭を打っており、ほかにも足を骨折する重傷だった。救急車が彼を高槻市民病院に運んだ。

茨木・高槻間の西国街道で、鋼材を積んだ十トントラックが対向車線にはみ出し、前方からや

ってきた黒いクラウンと衝突したのは昭和四十八年三月十八日のことである。
所轄の高槻署に届いた事故の第一報は、付近の人の１１０番からで、記録によれば午後八時五十四分である。そのご続々と１１０番と１１９番通報が金切り声で寄せられた。
これはのちの警察の現場検証でわかったことだが、トラックは道路上にくっきりとブレーキをかけたタイヤ痕を残しており、右にハンドルを切って車体の半分が対向車線にはみ出していた。
目撃者の話ではこのトラックの前に白い乗用車が走っていた。不意の道路横断者がいたために驚いたこのクルマは急ブレーキをかけた。この事実は別の黒々としたタイヤ痕からも証明できた。
トラックは法定積載量の三倍もの鋼材を積んでいた。もちろん違反である。運転手ももちろんこの事実を知っており、慎重に運転していたとのちに調べに対して供述した。
前のクルマのブレーキランプをみたか、という質問に対し、
「みました」
と運転手は答えたが、綿密な現場検証の結果彼自身の減速は遅れたと判定された。これは同じ職業の目撃者の感想と一致する。
「白いクルマのブレーキランプが消えたのでそのクルマが速度をあげたものと思ったのですが、そうではなかったので、わたしは衝突を避けるためとっさに右にハンドルを切りました。これが結果として事故につながりました」
運転手は首をうなだれて供述した。
この白いクルマに対する責任は追及されなかった。道交法には急ブレーキ禁止条項があるが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それには〝危険を防止するためやむを得ない場合を除き〟というタダシ書きがついている。目撃者の話では、白いクルマが急ブレーキをかけたのは危険防止のためだから、責任は問えない。

この事故の原因は、あくまでトラックの運転手が車間距離を保持しなかったことおよび無謀な追越しと結論された。

だが、警察にとって事故原因の究明は時間をかけても正確にやればいいことである。急ぐことではない。

それよりも緊急なのは救助であり、事故によって阻害された交通の回復である。

重傷を負ったトラック運転手は病院に収容されたが、不運に見舞われたクラウンの二人の男性はすでに焼死体となっている。

身許を確認し、とり敢えずは遺族に通知しなければならない。高槻署交通課は焼けただれたクルマの大阪ナンバーを大阪陸運局に照会した。

持ち主がわかった。

大阪市内に住む土建業者だった。

交通課員が電話をした。出てきたのは男の声で、業者本人である。

「これはお宅のクルマですね」

ナンバーを告げて尋ねた。

「そうです」

男の声は答えた。

「それがどうかしましたか？」
「高槻市内でトラックと衝突し、乗っていた二人の男性が焼け死んだんです」
「ええっ」
電話の相手は絶句した。
「それはホンマでっか！」
ようやく男は声を出したが、驚きのあまりにその声は慄えていた。
「まことに残念ですが、事実です」
相手はまだ息を呑んだままでいる。
「誰がそのクルマに乗っていたかわかりませんか」
それにはすぐに返事はなかった。

炎上したクラウンの二人の焼死体は警察車によって市立病院の霊安室に運ばれ、ここで検視をうけた。
これはのちの解剖結果だが、運転していた男には内臓破裂がみられ、たとえ焼死せずとも死亡した可能性があった。後部座席の男も生体反応があきらかだったので、生きながら炎と煙によって無残な最期を遂げたと判断された。二人とも死因はこの事故によると断定されたのである。
高槻署交通課員がナンバーからクラウンの所有者に電話を入れてみるとオーナーは在宅していた。とすれば誰か他人がこのクルマを運転しまたは同乗していたことになる。

ということは、所有者が誰かにクルマを貸したか、あるいは盗まれたかのどちらかになる。
「クルマを誰かに貸していましたか」
交通課員は重ねて尋ねた。
「じつは」
いい渋るような口調で相手はいった。
「そのクルマは貸しておったものです」
「誰にですか」
この質問に、尋ねられた者は意を決したように答えた。
「鬼頭組若頭の大江常安さんです」
「ほう」
尋ねたほうもショックをうけた。
鬼頭組は大阪を本拠とする日本最大最強の暴力団である。傘下三百九十七団体、構成員一万二千人を呼号する。ドンと呼ばれる鬼頭竜夫が組長として君臨し、彼らの雑多な非合法の暗躍は治安当局の絶えざる頭痛の種である。
傘下にそれほどの多数の団体を擁するというのは鬼頭組独特の組織によるからだ。鬼頭竜夫は直属の子分たちをそれぞれ独立させ組を持たせた。ドンの子分は同時に鬼頭組傘下としての親分である。だから、鬼頭竜夫は親分のなかの親分、王のなかの王に等しい。ドンと呼ばれるゆえんなのである。

このドンの直属の子分は五十三人いた。彼らのことを直若とも呼ぶ。子分のことを若衆もしくは若者と呼ぶ風習から、直属の子分つまりは直若なのである。もちろん若者といっても年齢には関係はない。彼らはすべて一家をなし、その親分である。彼らは自分たちのことを直参とも呼んだ。徳川幕府のもとでの旗本にみずからなぞらえたからである。

これは鬼頭竜夫が考えついた巧妙な組織論だった。旧来のヤクザのように単純な一家だと子分のとんでもない不始末が直接親分に累を及ぼしかねない。ひいては一家の浮沈にもかかわる場合もある。だが、子分たちがそれぞれ親分ならば、それらの責任を傘下の個別の親分たちに限定することができる。こうしておけば何がおころうとも鬼頭組自体はビクともしなくなる。

この組織論は無能あるいは狷介な子分たちを排除することにも役立った。鬼頭竜夫から突如組を持てと命令されて、ついに実行できなかった一匹オオカミたちは次々に組を去らざるを得なくなった。

鬼頭竜夫がこのような斬新な組織改編を行なった時は直接の子分は三十七人にすぎなかったが、曲りなりにも組を持ち運営できたものはうち十二人だけだった。それがいま直若五十三人というのは、残りのすべてが組織改編後にドンの眼鏡にかない抜擢された者たちということになるのである。

上が行なうなら下はこれに倣う、という言葉があるが、組を持ち親分となった直若たちは自分の組の主要な幹部たちにも組を持たせるようになった。つまりは責任を分担させることが、みずからの組織防衛には欠かせぬ条件であるとドンから学んだためである。

この卓越したドンの新組織はすっかり定着し、改編後十数年にして巨大な鬼頭組が姿を現わすようになったのである。それはめいめいの組が勢力拡大に狂奔した結果であり、そのために鬼頭組傘下の各組が競争して各地に侵攻し、地方の中小各組織を露骨に吸収合併した成果でもあった。

高槻市内の西国街道でトラックに衝突し、炎上した黒いクラウンの所有者は、高槻署の問い合わせに対して、このクルマは鬼頭組若頭大江常安に貸したものだと答えた。

「誰が乗っておったかわからんが、二人も焼け死んだとなればエライこっちゃ」

相手のあわてぶりは電話を通じてもはっきりとした。

高槻署交通課員はあと三、四の質問をしたが、答えはどれも知らない、わからないばかりだった。ただわかったことはこのクルマは昨年秋から長期貸与されていたという事実だけである。

高槻署交通課はすぐこの情報を刑事課に通知した。刑事課の宿直警部は大阪府警捜査四課に報告するとともに自宅に帰っていた刑事課長にも電話で知らせた。

「それでは焼死した二人のうち一人は大江の可能性があるな。すぐ署に行く。そしてマル暴全員に非常呼集をかけてくれ」

あわただしく電話は切られた。マル暴というのは暴力係刑事ということである。

いっぽう通報をうけた大阪府警捜査四課も待機班班長の警部が安倍毅課長に電話を入れた。

「交通事故に間違いはないんだな」

四課長は念を押した。

「高槻署の報告によりますと間違いはなさそうです」
「おれはすぐ本庁に行く。その前に待機班は大江常安の所在確認をやってくれ」
「わかりました」
捜査四課から六人の刑事が二人ずつに分かれて、鬼頭組本部、大江組事務所、大江常安の自宅へとそれぞれ急行した。
二人の刑事が西成区内の大江組事務所前に着いたのは午後十時三十五分だった。
民家の密集したところにある仕舞屋風の事務所である。以前は金物商の店舗だった名残をとどめている。この事務所の前には人だかりがしていた。どれもヤクザ風の男ばかりである。
彼らをかきわけて二人の刑事はひらかれた曇りガラスの引き戸の入口からなかにはいった。二人をとがめる者はいなかった。
内部は街の不動産屋のようなたたずまいである。スチール製のデスクが並べられロッカーも置いてある。ただ白木の神棚と組の名入りの赤い飾り提灯の列が、いかにもこの稼業の雰囲気をただよわせていた。
事務所のなかにも組員たちが大勢いた。
「誰や」
するどい目がいっせいに二人の刑事に注がれた。
「何や。四課のデカさんやないか」
顔見知りの年輩の男が声をかけてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com